

先週私たちは、パウロが、ユダヤの議会の前に立たされるのを見ました。この裁判は、ローマ市民のパウロにとっては、決して正式なものではありませんでしたが、でも、指導者たちに主を証する機会としては重要なものであったと言えます。ところが、その初めから律法に基づいた正しいさばきが行われることがなかったので、パウロはその中でこう叫ぶのです。「私は死者の復活という望みのことで、さばきを受けているのです」。彼のこの発言によって、議会は、復活を信じるパリサイ派と、そうでないサドカイ派との間で二分されます。そして、その騒ぎがいよいよ大きくなるにつれ、パウロは彼らによって引き裂かれそうになるのです。

幸い、千人隊長と兵士たちによって、彼はそこから救出されます。でも、さすがに、ここまでギリギリの所を通らされると、パウロも勇気を失いかけたのでしょう。その夜、主は彼のそばに立ち、こう語られるのです。「勇気を出しなさい。あなたはエルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかしをしなければならぬ」。このことによって、彼がどれほど力づけられたかは記されていません。でも、この時のパウロには、間違いなく、この主の現れとみことばによる約束が必要だったことなのでしょう。なぜなら、この後、事態は、さらに危険な方へと向かっていくからです。

12-15節「夜が明けると、ユダヤ人たちは徒党を組み、パウロを殺してしまうまでは飲み食いしないと誓い合った。13 この陰謀に加わった者は、四十人以上であった。14 彼らは、祭司長たち、長老たちのところに行って、こう言った。『私たちは、パウロを殺すまでは何も食べない、と堅く誓い合いました。15 そこで、今あなたがたは議会と組んで、パウロのことをもっと詳しく調べるふりをして、彼をあなたがたのところへ連れて来るように千人隊長に願い出てください。私たちのほうでは、彼がそこに近づく前に殺す手はずにしています』」。

よく言うことですが、たった一人でも誰かに憎まれたり、殺されそうになると、私たちは生きた心地がしないと思います。ここでパウロの殺害計画に加わったのは、数名ではありませんでした。40人、いや40人以上のユダヤ人たちが、彼を殺すまでは、飲み食いしないと誓い合ったのです。飲み食いをせずに、人はいつまでも生きられませんから、彼らは、このことをすぐにでも実行するものとして考えていました。

では、この「ユダヤ人たち」とは、どういう人だったのでしょうか？彼らが、祭司長たちや長老たちに、「あなたがたは議会と組んで」と言うところからして、彼ら自身は、議会に属する者ではなかったようです。宮で騒動が起きた時、パウロを打ち叩いていた人々だったのかも知れません。この中には、アジヤから来たユダヤ人、つまり、パウロを最初に訴えた人たちが含まれていたことも考えられます。

ここで、パウロがユダヤ人たちに訴えられた、もともとの理由について思い出したいと思います。パウロは、なぜエルサレムで、ユダヤ人たちから訴えられたのでしょうか？それは、アジヤから来たユダヤ人たちが、パウロをして、彼が宮の中に異邦人を連れ込んだと思ひ込み、彼を神の民、律法、宮に逆らう者として訴えたからです。ということは、パウロを訴えた者たちは、当然それらを重んじる者であったということです。

では、どうですか？祭司長や長老たちのところに行き、議会と組んで、パウロを連れて来るように願った者たち、つまり、パウロの殺害計画に加わった者たちは、パウロが律法によって正しくさばかれ、有罪判決がでたので、そのさばきを下すという意味で、彼を殺そうとしたのですか？違います。では、パウロを議会のもとに連れて来る理由として、彼らが、祭司長たち、長老たちに「もっと詳しく調べるふりをして」と言ったのは、どうでしょう？彼らは、本当にパウロを調べるつもりでいたのですか？いいえ。「そのふりをして」ですから、パウロを取り調べるためではなく、途中で殺すために、そのような偽りを語らせようとしたのです。

ですから、こんなことはあえて言う必要もないですが、パウロを殺そうとした人々、そして、彼らの策略に手をかした祭司長たちや長老たちはみな、律法を守る者ではなく、むしろ、それに背く者です。なぜなら、彼らは、律法に基づいて正しいさばきを行うことをせず、でも、パウロを死に値すると勝手に判断し、その計画の実行のためなら、平気で偽りを語る者であったからです。律法を守り行うことでは、誰も救われません。なぜなら、それを完全に行える人はいないからです。それゆえに、律法それ自体は、いのちを与えるものではな

く、むしろ、私たちの罪を明らかにするものです。でも、それによって私たちのうちに罪の意識が生じ、自分が罪人であるとわかることで、私たちは救い主イエスのもとへ、つまり、その救いへと導かれるのです。

では律法は、悪いものですか？いいえ。律法は、神様のことばであるゆえに、それは良いもの、聖なるものです。ただ私たちとしては、その罪、自己中心さのゆえに、それをことごとく守り行うことはできませんが、でも義なる方、罪のない主イエスは、神様のみこころとしての律法をことごとく行って下さいました。では、律法が良いもの、聖なるものであるなら、ここでパウロを殺そうとした者たち、また偽りを語ろうとする祭司長たちや長老たちは、神様の前にどのような者となりますか？彼らは、間違いなく、神様に敵対する者です。

パウロは、今まさにそんな彼らの手に落ちそうになっていたわけですが、主は、ご自分に敵対する者たちから彼を助け出されます。どのようにしてですか？二つのポイントがあげられると思います。一つ目は、「パウロの姉妹の子」です。そしてもう一つは、パウロが生まれながらにもっていた「ローマ市民権」です。


16節「ところが、パウロの姉妹の子が、この待ち伏せのことを耳にし、兵營に入ってパウロにそれを知らせた」。この「パウロの姉妹の子」とは、つまり、パウロの甥っ子のことです。彼の親族については、他にの所では言及されていないので、彼がどのような人であったのか、なぜユダヤ人たちの陰謀を知ることができたかは謎です。パウロが、もともとパリサイ人であったところから、彼の甥も、ユダヤ人たちの間で何らかのコンネクションがあったことが考えられますが、実際のところはわかりません。

いずれにしろ、彼がパウロに告げ知らせることで、この殺害計画は、千人隊長の知るところとなり、パウロは守られるのです。でもどうでしょう？この甥が取った行動は、おじさんを守るためには、当然のことであったと言えると思いますが、でも、もしそれが誰かにバレてでもしたら、今度は、パウロだけでなく、間違いなく、彼自身にも危険が及んだことでしょうか。そういう意味で、彼の行動は、勇気あるものであったということが出来ます。それによって、パウロは議院に連れて行かれることなく、殺されることから逃れるのです。

もう一つのポイントについて見ます。彼の甥が、殺害計画を知らせに来た時、パウロは、ローマ兵營の中にいたわけですが、それは彼がローマ市民であったからです。つまり、パウロは、ローマ市民であったゆえに、ユダヤ人たちの悪の手から守られたのです。というのも、もし彼がローマ兵たちの中にいなければ、どうですか？宮で騒動が起こった時、千人隊長にむち打ちを命じられた時、ユダヤの議院の前に立たされた時、そして、この40人以上による殺害計画が起こった時、もしローマ市民権をもっていなければ、パウロはとっくに殺されていたことでしょうか。でも、彼の意志に関わらず、彼が生まれながらにローマ市民であったので、それがユダヤ人たちの殺意の手から彼を守るものとなりました。

パウロをして、ローマ市民であったからこそ、彼が受けることのできた守りが、いかに特別なものであったかは、この後、カイザリヤにいる総督ペリクスのもとにパウロを送るため、千人隊長が出した命令からわかります。23-24節「そしてふたりの百人隊長を呼び、『今夜九時、カイザリヤに向けて出発できるように、歩兵二百人、騎兵七十人、^{そうへい}槍兵二百人を整えよ』と言いつけた。24 また、パウロを乗せて無事に総督ペリクスのもとに送り届けるように、馬の用意もさせた」。

歩兵二百人、騎兵七十人、槍兵二百人、これを合計すると470人です。千人隊長は、千人の兵士の上に立つ人ですから、そのうちの470人ということは、ほぼ半数です。たった一人の人のために、これだけの護衛をつけたのですから、千人隊長が、どれだけユダヤ人たちを警戒していたかが伝わってきます。もちろん、彼としては、自分の管轄内の治安を守ることが仕事ですから、当然のことをしたままでしょう。でも、パウロとしては、このことを通して、主の御名の証のために、ローマまでも導かれることを確信したに違いありません。

兵士たちは、命じられた通り、その夜九時に出発し、夜中にアンテパトリスという町まで行きます。それはエルサレムの北西約56キロに位置し、ヘロデ大王によって建設されたと言われています。そこから先は、騎兵たちに任せ、あとの兵士たちは、兵營へと戻っていきます。前の地図で場所を確認しておきましょう。

いかがですか？「パウロの姉妹の子」にしても、「ローマ市民権」にしても、それはパウロ自身がコントロールできる範囲を遥かに超えていたわけですが、彼はたまたまそれらによって危険な状態から助け出されたのでしょうか？そこには神様の介入はなかった、と私たちは言うべきですか？いいえ。これもすべて神様の御手の中で起こった出来事です。つまり、「あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかしをしなければならない」とおっしゃった主が、ご自分に敵対する者からパウロを助け出されたのです。ですから、全ては主の導きと守りの中で起こっていました。彼によって、主の御名があかしされるためです。

ちなみに、ここで登場する総督ペリクスとは、紀元 52 年から 58 年頃まで在任したといわれますが、パウロがキリキヤの出、つまり、自分の管轄州内の者であることを知ると、彼を訴える者たちが来るまで、パウロをヘロデの官邸に守っておくように命じます。このようにしてパウロは、なわめと苦しみの待つエルサレムを後にしたわけですが、彼がエルサレムに入ってから、そこを去るまでのことを思い起こす時、あなたの心にはどんなこと（何）が残っていますか？

パウロのそばに立たれた主が、「あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように」と言われたということは、主は、パウロをして、彼がなすべきあかしをした、と認められたということです。でも、そのあかしを通して、どれだけの人が主への悔い改めと信仰とに導かれましたか？それは、ほとんど無に等しかったのです。では、パウロが御霊によってエルサレムへと導かれ、なわめと苦しみを通して主をあかししたことをあなたはどのように受け止めておられますか？それは無駄なことだったのか？私たちは、パウロと全く同じ道を歩むことはなくても、主を証するという同じ使命を主から受けています。そのことのために、御霊を受け、今それぞれのところに遣わされているのです。あなたは今日、この主からの使命に生きておられますか？

私たちの周りには、このユダヤ人たちのように、自分たちの主張していることと、実際に行っていることとが一致していない人が大勢います。他者を傷つけたり、偽りを言うことを平気でする人がいることでしょう。また、この千人隊長にしても、彼（クラウデオ・ルシヤ）が、ペリクスに宛てて書いた手紙を見ると、パウロを以前暴動を起こしたエジプト人だと思ひ込み、彼を鎖でつなぎ、むち打ちにしようとした自分のミスは隠し、でも、パウロがローマ人であるのを知ったから助けた、と事実とは異なる証言をしているのがわかります。つまり、そのように自分を守るために、事実とは違う証言をする人もいるのです。

そのような人々に対して、主を証する動機はとても大事です。というのも、主の十字架の愛を知ること、主を愛し、主に従う者は、主のすばらしさを知るゆえに、相手がどういう人かに関わらず、主を証します。パウロに語られたように、主が「あなたは、わたしのことをあかしした」と、そのあかしを認めて下さるのは、そのような人ではないでしょうか？主イエスは、苦しみを受け、十字架にかかって死んで下さるほどに、あなたのことを愛して下さっています。それゆえに、その愛を知り、それに応えて、ご自分との愛の関係に生きるすべての者に、主は、御霊とみことばによる導きと、ご自分に対するその信仰がさらに引き上げられるための助けと守りとを与えて下さるのです。私たちが主をあかしするため、それを通して私たち自身、またそれを聴いて、主に立ち返るすべての人が、主イエスご自身に近づけられるためです。